

その34 万葉ファンタジア
「万世集から万葉集へ」
(その1)



「月立ちて ただ三日月の ^{まよね}眉根かき ^け日長く恋ひし 君に逢へるかも」

大伴坂上郎女(巻6・993)

「^{ふりさ}振仰けて 三日月見れば 一目見し ^{まよび}人の眉引き 思ほゆるかも」 大伴家持(巻6・994)

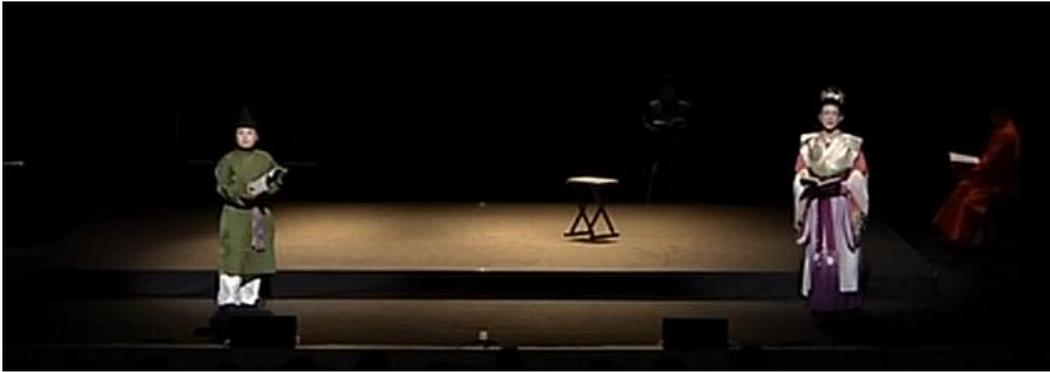
万葉集には、「序」がないことから、それを誰が編纂し、誰が命名したのか、その書名の義、成立の由来などについては詳しく分かっていない。古来いくつかの説があるが、1人の編者によってまとめられたものではなく、何人かの手を経て、最終的に大伴家持が20巻にまとめ上げたのでは、というところが通説のようだ。先に、『万葉幻視考』で、大浜巖比古氏は、大胆な新説、光仁天皇勅撰説を提起している。その「解説」で、坂本信幸氏は次のように書いている。

<現『万葉』が勅撰集としての道を歩みはじめる、とするこの説は、『万葉』編纂にかかわる極めて重要な見解である。『万葉集』の編纂を、「ならの御時」「平城天子」の詔によるものとする『古今集』序の説や、「高野の女帝の御代天平勝宝5年」に「左大臣橘卿諸卿大夫等」が撰んだとする『栄華物語』の説等との関連も更に考えてゆかねばならない問題であるが、こういった点についてどのような見解を抱いていたのか今は聞く術もないのが残念である> (P308～309)

そこで、これらの諸説を参考にしつつ、私なりの「万葉集ができるまで」、そして、私独自の「家持はなぜ歌をやめたのか」について、大浜氏に倣って「幻視」してみた。万葉ファンタジア「万世集から万葉集へ」、3回シリーズの今回は(その1)である。

最初の登場人物は2人。弱冠16歳の大伴家持とその叔母で、万葉集を代表する女流歌人大伴坂上郎女である。家持の父大伴旅人が2年前に亡くなった後、その異母妹にあたる坂上郎女は、家刀自として大伴家の家政を取り仕切り、家持の母代わり、そして、歌の師ともなった。

家持の歌が、初めて作歌の時期が明記されて万葉集に載ったのは天平5(733)年、家持16歳の時のこと、坂上郎女との相聞歌だった。



少年家持（加藤記生さん）

大伴坂上郎女（紺野美沙子さん）

「家持さん、貴方ももう16歳。大宮仕への日も近いことでしょう。その後歌の学びは進んでおられますか？」

「はい……それがなかなか……」

「亡きお父上が恥をかくことのなきよう、お励みなさい……では、家持さん、歌の学びです。夜空を見上げてごらん下さい」

「はい？ 夜空を見るのですね？ ……いつものように、月は青く、星々は輝いていますが……」

「いつものように……ですか？ ……今宵は、美しい三日月ではありませんか？ ……それでは、『初月』^{みかづき}をお題に、お互い歌を詠みましょう。まず、私から家持さんに歌を贈ります」

「月立ちて ただ三日月の 眉根^{まよね}かき 日長^けく恋ひし 君に逢へるかも」

大伴坂上郎女（巻6・993）

家持は、恋歌の名人坂上郎女の歌を聞いて、思わず感嘆の声を上げる。

「ああ、なんと素晴らしい。さすが叔母さま！ ……『月立ちて』って、とっても美しい歌い出しですね。『姿をあらわしてたった3日という細い月の形の眉を書いたら、ずっと恋しく思っていた貴方に逢えました』という恋歌ですね」

「ホホッ、『眉を書く』？ ……それだけ、かしら？ ……『眉をかく』というのは、眉を筆で書くという意味だけではありません。眉がかゆいので指でこのように搔くというのです。眉がかゆいのは、恋人に会える前兆として世の女性たちに喜ばれることを知っているでしょう」

「そうだったのですか……では、叔母さま、鼻がかゆいのは何の前兆なのですか？」

「また、お戯れを……お戯れは上手になりましたが、女心の学びはまだ足りないようですね。それでは、家持さん、あなたの番です。お返しの歌をお詠みなさい」

「返し歌、ですか……困ったなあ……ちょっとお待ちください」

「家持さん、なぜそのように鼻を搔いておられるのですか？」

「困ると、鼻がかゆく、ピシピシとなるのです……困ったなあ……叔母さまの切れ長の目……そして、はい、三日月のような美しい眉……出来ました。このような歌でいかがでしょう？」

「^{ふりさ}振^{まよび}上げて 三日月見れば 一目見し 人の眉引き
思ほゆるかも」 大伴家持（巻 6・994）
（はるかに空を振り仰ぎ、浮かぶ三日月を見てみる
と、ただ一度きり見た人の引いたまゆ毛の様子が思
われてなりません）



「あら、なかなか良き歌ね。でも、ここに詠われている女の方って、一体誰のことかしら？」

「もちろん、叔母さま……いえ、大嬢^{おおいらつめ}のことを詠いました」

「あら、私の娘の大嬢？……でも、2 人とも、毎日のようにお会いしていますけど……一度見ただけなのかしら？」

「はい……その……いいえ……その、誰かは内緒です」

「^{おなご}女子も、歌も、お父さまの血を引いているようですね。女子はともかく、学びは真似びです。そう、まずは、お父上の歌を真似ぶのです」

「でも、父上の歌をいくら真似ても、父上のような良き歌は詠めません」

「いきなり良き歌を詠もうとせず、まずは多くの歌を詠むのです」

「良き歌を詠むのではなく、たくさんの歌を詠む、のですか？」

「そうです。そして、それを日記をつけるように書きとめておくのです」

「日記をつけるように？」

「いわば歌日記です。そして、いずれ、それをもとに歌集をお作りなさい」

「歌集を？それは、歌の聖、『柿本人麻呂歌集』のような、『大伴家持歌集』というのですか？」

「いいえ、違います。旅人さまの果たせなかった夢、これまでになかった歌集を作るのです」

「父上の果たせなかった夢？」

「そうです。そのために、これまでお父上が集めた歌をお預かりしています。お父上や私の歌も合わせて、それを家持さまに託しますので、お父上に代わって良き歌集をお作りなさい」

「叔母さま、その良き歌集とは、どのような歌集なのですか？」

「それは、古から新しき歌まで、多くの歌を集めた『万世に語り継ぐ歌集』のことです」

「古から新しき歌まで、多くの良き歌を集めた『万世に語り継ぐ歌集』、ですか？」

「そうです」

「万世に語り継ぐ歌集……万世……歌集……万世集……ならば叔母さま、歌集の名は『万世集』ということで、いかがです？」

「……『万世集』……いい名です。そう、『万世集』を作り、旅人さまの果たせなかった夢をかなえるのです」

時代変わって、天平勝宝 5(753)年、左大臣橘諸兄卿の邸で、諸兄どのから声がかかり、諸兄どのを慕うものたちが集まって催された歌会の中のある出来事を、夢か現か幻か、家持は語り始めます。

「そもそも橘諸兄どののはわが大伴一族との縁も深く、私も常々諸兄どのには親しくお仕えし、とりたててもいただきました。諸兄どののは、元の名を葛城王と言い皇族のお一人でしたが、その後臣籍に降下されて、その母橘三千代さまの姓である橘宿禰を継ぐことを許され橘宿禰諸兄どのとなられました。その後は聖武天皇の覚えめでたく、生前は滅多になることがない正一位という最高位に昇りつめられました。歌にも造詣深く、その数は多くはありませんが、素晴らしい歌を残されています。ただ、その後聖武天皇は孝謙天皇に譲位されて上皇となったこともあり、孝謙女帝のもと藤原一族が権勢を思いのままにしていた折の宴でした。ひとまず歌会が終わると、宴の主諸兄どのが、おもむろに一同を見渡しながらかし始めました」

「おのおの方、今宵も良き歌会となりましたが、折角の機会でありますので、この際皆さまに申し上げたき儀がございます。聖武天皇が太上天皇になられて早 4 年、今や孝謙天皇を手中に入れた太政大臣藤原仲麻呂どのの権勢を認めぬわけにはまいりません。申し上げるまでもなく、その勢いを劔太刀もて止めるわけにはまいりません。しかし、私どもには歌があります、^{こと}「言の刃」なる劔があります。私どもがお仕えた上皇さまも良き歌を数多く残されておられます。その内の一首、私^{こと}橘諸兄が臣籍降下をした折に、大君から賜った歌を忘れることができません」

天平 8 (736) 年に行われた橘諸兄の臣籍降下については、『続日本紀』に記録されていますが、この時の聖武天皇の歌は、万葉集巻 6 に収められています。

「橘は 実さへ花さへ その葉さへ ^え枝に霜降れど ^{とこは}いや常葉の木」 聖武天皇 (巻 6・1009)

(橘は実や花やその葉もすばらしいものですが、枝に霜が降ってもますます栄える常葉の木ですね)

「この素晴らしい歌を賜り、『願はくは、橘氏^{しゆめい}の珠名^{つた}を流へて、万歳^{ばんせい}に窮^{きはま}り無く、千葉^{せんよう}に相伝へむ』(『続日本紀』) と、橘の清き名^{あか}を守り、明き心^{あか}もて大君にお仕えする決意^{あか}を新たにしました。

過日上皇さまにお目にかかった折、上皇さまは、われらが貴人^{うまびと}の歌を集め、その中から良き歌を選び、千葉^{せんよう}に相伝えるべしと申されました。そこで、わが大君、上皇さまの治世を記念して、われらが歌を集め歌集としてとりまとめようではありませんか。申せば、聖武太上天皇勅撰歌集を作るのです。これまで『柿本人麻呂歌集』や『高橋虫麻呂歌集』のように、一人の手で詠い集めた歌集はすでにありますが、そのような歌集ではありません。時代^{とき}を超えて千葉に相伝えるべき歌を選び、歌集としてまとめるのです。わが橘家^{ふみくら}の文庫にも、いくつかの歌や歌集がすでに収められております。家持どの、いかがですか？ 大伴家^{ものふ}と云えば、『武^{つかさ}の官』のみならず『言^{つかさ}の葉の官』、歌をも伝え語り継ぐ家。とりわけ家持どののは、言わずと知れた歌の名手。『万歳無窮、千葉相伝』……そうよ、『万歳千葉』に伝える歌集を取りまとめのお役を負うてはいただけませぬか。

『万歳、千葉』は、「万年、千年」の意で、「長い年月」、「永遠」を願っていう。

「『万歳千葉』に相伝える大君や貴人の歌集でございませうか？」

「そう、お主やお主の父上旅人どの、叔母上の坂上郎女どののような歌の名手の歌は言うに及ばず、代々の大君やわれら貴人の歌を集めるのよ」

「……お言葉でございますが、貴賤に関わらず時代の良き歌を集めるといふのはいかがにございませうか？」

「貴賤に関わらずとな……」

「貴賤に関わらず、^{くさくさ}種種の民の歌もともに収めるのでございます」

「それは難しかろう。下賤の者たちの歌に取り立てて歌集に収めるようなものはなかろうに。そもそもその者たちは歌の作法を知らぬであろうが……」

「確かに歌の作法も知らず拙き歌が多くございます。ただし、中にはその思いを詠って驚くほど見事な歌もございます」

「驚くほど見事な歌とな？それについては、つぶさには存ぜぬが……」

「すでに東国の農民たちの歌、東歌や防人の歌の一部は集めており、その中には良き歌も……いずれ防人のお勤めのため、東国から難波の湊に集まってくる防人たちの歌をさらに集めようと思っておるところにございます。と申しますのは、実は私、父旅人や叔母坂上郎女から、同様の申し越しもこれあり、若き^と時代より歌を集め、歌集を作っていたところにございました。両人が残した数多くの歌を書き溜め、また父上が集めた歌集などもすでにこの手に収め、かねてより編輯を始めていたところにございます」

「それは祝着至極、ありがたきことよ。ならば、話は早い。その歌集、しかとお頼み申す」

「確かに承りました。大君をお側近くでお守りするのが大伴家のお役目。剣太刀を以ってお守りするも、言の刃を以ってお仕えするも同じこと。『万歳千葉』に相伝える歌集のお役目、謹んでお引き受けさせていただきます」

「それはますます祝着至極。して、その歌集の名は何と申されるか？」

「実は、『万歳千葉』と同じく、その歌集、『万世に語り継ぐ歌集』ということで、はからずも『万世集』なる名を考えておりました。『万歳千葉』に相伝える歌集は、『万世集』と名付けることはいかがにございませうか？」

「『万世集』……それは良き名じゃ。結構、結構。それでは、家持どの、われらの『万世集』、よろしく願ひいたしましたぞ」

こうして、『万歳千葉』に語り伝える「万世集」が、その後、いかなる経緯を経て「万葉集」になるのか……それは、いずれ、「万葉ファンタジア～万世集から万葉集へ（その2）（その3）」で明らかにする。



（中央）大伴家持（和泉元彌さん）